

# 日常に戻る博物館

## —川崎市立日本民家園におけるコロナ禍前後の開園状況を事例に—

川崎市立日本民家園 真保 元

### はじめに

周知の通り、2020年初頭に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界中に蔓延した。博物館施設では接触の観点などから、触れる展示といったものが相次いで取りやめとなり、各種イベントも中止となった。筆者の勤務している神奈川県川崎市の野外博物館である川崎市立日本民家園（以下、民家園）も例に漏れず、触れる展示やイベントが中止となっていた。あれから3年が経過した現在、民家園も含む近隣の博物館では、イベント類が復活しつつあり、コロナ禍以前の日常を取り戻してきているようにも思える。

ただし、日常は記憶に残りにくい。そこで本稿では、日常を意識的に記録する意味合いも込めて、民家園がここ数ヶ月でコロナ禍以前の日常へと戻っていく過程を報告していきたい。なお、本稿は民家園の事例をもとに見解を述べる箇所もあるが、見解は筆者個人のものであり、民家園や筆者を含む民俗担当学芸員の総意ではないことに注意されたい。

### 1. 問題の所在

コロナ禍と博物館の観点では、博物館協会が発行する雑誌『博物館研究』においても度々特集が生まれ、各地の博物館から報告が寄せられている（日本博物館協会（編）、2020）。『神奈川県博物館協会報』においても同様に報告が寄せられている（島宗、2022）。

近年の民家園をとりまく報告としては、まずは渋谷卓男の令和4（2022）年度の報告があげられる。渋谷は、博物館活動について総論的に報告し、コロナ禍をめぐる野外博物館の現状と課題を民家園の動向から述べている（渋谷、2022）。筆者もまた、コロナ禍における博物館の体験学習事業を報告したことがある（真保、2023）。

上記の報告はあくまでもコロナ禍の各種イベントが規制された中での報告であり、日本政府が令和5（2023）年5月8日に新型コロナウイルスを5類

へと変更したうえでの民家園での対応、いわばコロナ禍以前の日常的な活動へと戻っていく過程については、刊行時期の都合上触れられていない。

本稿冒頭でも触れたように、日常の記録は忘れやすいし、記録に残らないことが多い。すでに同様の関心から博物館におけるコロナ禍に関する資料の収集報告が寄せられているが（持田、2020）、博物館における日常および、それがいつどのように変わったのかも、記録をしていく必要がある。そこで、本稿では筆者の勤務している民家園に焦点をあわせ、マスク着用自由化や5類変更に合わせた各種対応の変化を事例に報告を行う。

### 2. 川崎市立日本民家園の概要

本章では、事例を提示するにあたり、本稿で対象とする民家園の概要、およびイベント開催状況について整理する。川崎市立日本民家園は神奈川県川崎市に位置する野外博物館（登録博物館）であり、昭和42（1967）年の開園以来、25件の文化財建造物を保護している。

職員体制について記述したい。民家園は指定管理者制度を導入しており、運営体制としては市の直営である学芸班と、指定管理者が運営する管理班の2つの班が存在する。直営である学芸班では、資料の調査研究・企画展示などの学芸業務などを中心に行っており、管理班にはミュージアムショップや伝統工芸館（藍染め体験施設）の運営、入園受付などを委託している。

### 3. 日常に戻る博物館

本章では、民家園における感染症対策にまつわる変化を記述していく。令和5（2023）年3月13日以降、マスク着用が個人判断となったが、それに伴い、民家園では感染症対策の変更を行った。なお、以下「現在」と記述される箇所があるが、これは原稿執筆時の令和5（2023）年9月現在のことである。その他、日付が出てくるが特段のことが

ない限り、令和5(2023)年のことである。

### (1) 消毒の実施・マスクの有無

コロナ禍以来、民家園ではこれまで職員による館内施設の定期的な消毒を行ってきた。消毒のタイミングとしては、9時、11時、13時、15時の4回がある。消毒にはハイターを薄めたものを用いた。キッチンペーパーにスプレーで浸透させて、館内の手すり、ドアノブ、トイレ、ロッカーなどの消毒を行っていた。

この消毒は、3月13日の時点で取りやめとなり、食事後に各自の机を消毒するだけに留めることとなった。これと同時に、1時間毎に事務室の窓の開放をして換気をしているが、これは10月現在（以下現在）でも継続されている。

また、入園時には手指の消毒を呼びかけていたが、現在は任意での消毒となっている。当園で活動をしているボランティア組織「炉端の会」が古民家内で囲炉裏の火焚きを行なう際も、これまでは各古民家内に消毒用アルコールを持参してもらっていたが、3月16日以降は取りやめとなった。

マスクは、職員は3月13日をもって、マスクの着用が通常は義務ではなくなった。ただし、他人と話す際などには着用となっており、窓口での対応の際も着用となっている。ちなみに、5月時点でのマスク着用率は事務室では全員が着用しており、筆者も含め、屋外での作業時には外して作業することが多いのが所感であった。その後、夏になるにつれ、筆者も含め一部の職員はマスクを外すようになった。来園者に対しては、マスク着用は個人判断である。なお、民家内で昔話の語り聞かせを行なう「昔話公演」の際は演者が高齢となっ

ていることから、マスク着用を呼びかけていたが、これも6月にとりやめとなった。市民団体「民具製作技術保存会」が主となって、竹細工やわら細工などの制作指導を行う「体験講座」でも、参加者同士の距離が近くなるためマスクの着用を呼びかけていたが、昔話と同じく現在では着用が自由となっている。なお、職員の食事については、これまで対面で食べることを禁止しており、斜向いになるように飛沫対策がとられていたが、これは現在でも継続されている。

### (2) おばあちゃんの昔話・スタンプラリー・ワークシート・炉端文庫

ここで紹介するものは、不特定多数が触れると予想されたため、使用中止となっていた常設設備である。来園者数が多くなると想定される今年度のゴールデンウィーク前に合わせて復活させた。

民家園は野外博物館のため、屋外の民家が常設展示の役割を果たしている。ただし、本館内に常設展示室も付属しており、民家の構造や作りなどが学べるようになっている。この常設展示室内に、民家での暮らしを子ども向けに解説するものとして、「おばあちゃんの昔話」という映像装置が設置されている（図1）。当該装置は、スイッチを押して映像が流れる仕組みとなっており、これまでは不特定多数が一つのものに触れることとなるため、使用中止となっていたが、4月末日時点で復活した。復活にあたって、当園職員で設備の点検を行ったところ、数年間使っていなかったため一部に異常があり、メンテナンスを行った。

次に、スタンプラリーについて記述する。当園では園内各地に民家にまつわる絵柄が記載されて



図1 おばあちゃんの昔話



図2 休止中のスタンプ小屋

いるスタンプを設置しており、本館などに置いてある「はんこ帖」（無料）にスタンプを押していくスタンプラリーを行っていた。コロナ禍が始まって以来、使用を中止にしていたものの、4月29日に復活となった。復活にあたって、スタンプの設置してあるスタンプ小屋（図2）を整備するために園内を巡検したが、窓部分に苔が生え、屋根には落ち葉が積もり、蜘蛛の巣などが張っている状態であった。

さらに、当初6箇所存在していたはずのスタンプ小屋のうち、1箇所が見つからないアクシデントに見舞われた。結果的に見つかったものの、当初設置されていた箇所からはかなり遠い場所に収納されており、発見までに時間がかかった。理由としては、民家園では各民家が耐震工事・葺き替え工事などの工事を行うため、民家近くに併設されているスタンプ小屋も移動せざるを得ないためである。コロナ禍でスタンプが使用中止の間に、スタンプ小屋を移動させた結果、どこに置いてあるのかが認識されなくなってしまった。この件は、移動の件を共有している職員が異動・退職したため、発見に時間がかかってしまったことが一因である。博物館における情報の伝達・継承の問題であり、短期間で人員が入れ替わる博物館の一つの側面といえよう。現在では本館、佐地家、太田家、北村家、清宮家、工藤家に設置をしている。

続いて、ワークシートについてである。元々は民家内に子ども向けのワークシートである「古民家たんけん隊ワークシート」を各村に1つずつ設置してあったものの、使用中止となっていた。今回復活にあたり、鈴木家、佐々木家、太田家、北村家、工藤家に4月29日に設置をして、利用再開と



図3 古民家たんけん隊ワークシート

した（図3）。

最後に炉端文庫についてである。通常、博物館では来園者向けに資料室のような図書コーナーが設けられる事が多い。民家園は野外博物館であり来園者向けに図書室は設けていない。その代わりに、本館常設展示室の一角に炉端文庫という本棚を設けている。4月18日に復帰作業を行った（図4）。

### （3）ボランティア組織「炉端の会」の活動

炉端の会の活動については、コロナ禍の中でも多岐にわたる変更を繰り返してきた経緯があるため、本稿での詳述は避けるが、大きく変わった点として、通常活動に戻ったことがあげられる。

まず、コロナ禍における炉端の会の活動状況は、東京都の感染症警戒レベルが4になったら活動中止となっており、これまで、コロナ禍では炉端の会の活動は各会員の感染症への意思を尊重するため、有志での活動であった。ボランティアのためもともと活動は義務ではないが、さらに気楽に休めるように配慮した。これまでは民家での囲炉裏の火焚きのローテーションがあり、囲炉裏を焚く家の順番が決められていたが、有志の際には人数を確実に確保できないため、ローテーションを無



図4 復旧された炉端文庫

くし、それぞれのメンバーによる一存で囲炉裏を焚く家が決められることとなった。

今回、通常活動に戻るにあたり、囲炉裏の火焚きローテーションの復活、活動時のマスク着用義務の取りやめが行われた。同時に、従来一日の活動開始の際に行っていた職員立会いのミーティングの時刻も5月9日以降、10時から9時30分へ戻した。さらに、火焚きの時間も14時30分までだったものを、コロナ禍以前の15時30分に戻すこととなった。

#### (4) イベントの復活

次に、教育普及活動としてのイベントについて、開催状況を概観したい。民家園ではコロナ禍以前では、七夕、夏祭り、お月見、浄瑠璃、旧所在地交流事業、歌舞伎、小正月などイベントを重点的に行ってきた。季節には関わらないものの、定期的に催されるものとして、昔話公演も存在する。総じて、毎月何らかのイベントを開催しており、教育普及活動に特に力を入れてきたといえる。

これらのイベントはコロナ禍では縮小・中止となっており、例えば令和2(2020)年では展示解説が行われる程度であった。しかし、令和4(2022)年度から昔話公演、旧所在地交流事業を少しずつ復活させている。これにあわせ、「民家園カレンダー」を令和5(2023)年4月より復活させることと

なった。民家園カレンダーは3ヶ月分ほどのイベント情報が記載されているチラシである。コロナ禍以前はA3二つ折りであったが、現在はA4両面1枚となっている。なお、令和4(2022)年度のイベント開催時は消毒液などを設置し、会場内で使用を呼びかけていたが、今後の開催にあたっては対応の変更を求められるだろう。

#### むすびに

本稿では博物館における日常への問題関心から、民家園を事例にマスク着用自由化および5類移行前後の対応を報告した。なお、9月時点で新型コロナウイルスの第9波が来ているともいわれている。このような途切れることなく移りゆく世相に対し、対応の変更を余儀なくされているのが現状ではある。他館はコロナ禍を経て、現在どのような状況になっているのか、ぜひともご教示をいただければ幸いである。

#### 引用文献

- 持田 誠 2020 「コロナ関係資料収集の意義と必要性」『博物館研究』55 (11).
- 日本博物館協会(編) 2020 『博物館研究』55 (11).
- 渋谷卓男 2022 「野外博物館の現状と課題—川崎市立日本民家園」『博物館研究』57 (7).
- 島宗美知子 2022 「新型コロナウイルス感染症下での博物館活動～横浜みなと博物館の対応及び活動事例」『神奈川県博物館協会会報』93.
- 真保 元 2023 「コロナ禍における博物館の体験学習事業—川崎市立日本民家園を事例に—」『現在学研究』11.